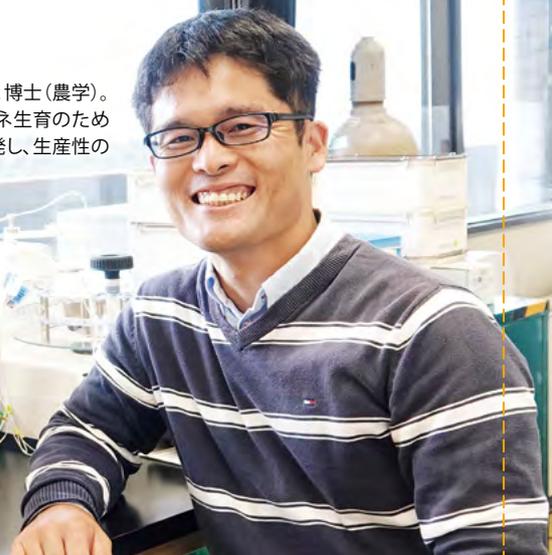


地球規模課題対応国際科学技術協力プログラムSATREPS
研究課題「肥沃度センシング技術と養分欠乏耐性系統の開発を統合した
アフリカ稲作における養分利用効率の飛躍的向上」

Profile

大阪府出身。2010年 京都大学大学院農学研究科博士課程修了。博士(農学)。
国際農林水産業研究センター(JIRCAS)入所。16年より現職。イネ生育のための
養分が乏しいアフリカの土壌に合った新たな稲作技術を開発し、生産性の
改善ならびにアフリカにおける食糧の安定生産を目指す。



マダガスカルの人々と 手を携えて農業に取り組む

国際農林水産業研究センター 生産環境・畜産領域
主任研究員

辻本 泰弘
Yasuhiro Tsujimoto



Q 研究テーマを一言でいうと?

A マダガスカルのコメの生産性向上を目指す。

マダガスカルはアフリカでも有数のコメ生産国ですが、リン欠乏など熱帯の風化土壌に見られるさまざまな問題により生産効率が悪く、貧困や食糧難といった問題を抱えています。そのため、日本のコメづくりのノウハウを生かして、現地の土壌に合った肥料技術の開発やイネの品種改良を行い、生産性向上に取り組んでいます。農家の方の協力が不可欠なので、実際に農村に入って意見や要望を聞くなど、積極的にコミュニケーションをとっています。研究チームは日本とマダガスカルの多様な人材で構成され、作物栽培学や土壌肥科学の他、心理学や農業経済学の研究者もいます。新技術の普及に対する農家の認識を分析したり、新技術の導入がどのくらい収入の増加につながるかを調査したり、いろいろな角度から研究に励んでいます。マダガスカルの人々と手を携えて生産性向上を目指しています。

Q マダガスカルと関わりを持ったきっかけは?

A アフリカの農業の発展に貢献したいという意志と、研究室がくれた縁。

中学生の時に黒柳徹子さんの著書「トットちゃんとトットちゃんたち」を読み、貧困に苦しむ子供たちを助けたいと思いました。大学進学の際に農学部を選んだのは、食こそが貧困対策の第一歩だと考えたからです。その後、北海道でのファームステイをきっかけにフィールド研究に興味を抱き、海外に多くの学生を送り込んでいる研究室の門戸を叩きました。そこで「アフリカの現場で農業の発展に貢献したい」と熱く語り、ほぼ裸一貫の状態でもマダガスカルに放り出されました。現地では行く当てもなく、たどり着いた村落の農家に転がり込み、調査研究への協力をお願いしました。「日本という国から貧しい若者がやってきた」と認識され、農家を転々としながら食事や寝床を提供してもらいました。実際に生活して、現地の人の優しさに触れ、一層、農村地域の発展に貢献したいと思ってJIRCASに就職。マダガスカルを対象国として2016年度にSATREPSの研究提案に応募して採択されました。こうして今もマダガスカルとつながっているのは、研究室がくれた縁ですね。

Q 研究において大切にしていることは?

A 実際にフィールドに出て、気付く力を磨くこと。

個々の研究成果も大事ですが、それ以上にプロジェクト全体の成果を生かしてマダガスカルの農村地域の発展に貢献することを目指しています。いつの日か、豊かになったマダガスカルを見るのが楽しみです。そのとき、ずっと協力してもらった農家の方々が温かく迎えてくれて、感謝の言葉をもらえたら最高ですね。一方で、アフリカの生活に慣れたことで感性が鈍くなっていないかと反省することもあります。感性とは気付く力であり、研究を続けていくためには非常に大切なものです。自分の置かれている環境とは全く異なる地域や社会に出れば、何か気付くことがあるはず。若い人はぜひ、怖がらずにフィールドに飛び出してほしいと思います。言葉も生活習慣もわからない場所へ行っても、意外に何とかなるものです。